



# 秋の野に咲きたる花を かき数ふれば七種の花

および  
指折り

やまのうえのおくら  
山上憶良

「秋の野に咲いている花を指折り数えてみると、7種類の花があります」。晩夏から秋への移ろいを、刻々と映し出す秋の七草。

「萩の花 尾花 葛花 瞿麦の花 女郎花 また藤袴 朝貌の花」。朝貌とは桔梗のことです。その七草を詠んだ「万葉集」の山上憶良は、どんな心情をこの歌に託したのでしょうか。

残暑の続くなか、各地からハギやススキ、オミナエシなどの便りが届く頃です。秋の花は、どこかに陰を宿しています。吾亦紅の暗い赤色はもとより、桔梗の青、女郎花の黄、彼岸花の真紅でさえ、花の咲く高揚感の内秘めて、涼しくひそやかな姿をしているようです。

百花繚乱で浮き立つような春の野ではなく、切なく花が揺れる秋の野を、古来、日本では「花野」と表現しています。

万葉集の歌人が詠い上げた日本の季節感、驚くほど繊細で複雑です。夏の光や色を送り出す、去りゆく季節の寂しげな秋の野の風情が、秋の七草にはあります。

秋の風。この季節、巷をスーッと通り抜ける一陣の風に会おうことがあります。

夏休みの明けた9月1日、風を連れて村の小学校に転校してきた三郎は、山の木々を騒がせてまた転校していきます。宮沢賢治「風の又三郎」は、この頃の情景を写しだした物語です。

「あいづ、やっぱり風の神だぞ。風の神の子っ子だぞ」

「二百十日で来たのだな」少年の行くところ、風が窓を鳴らし木立を揺らします。友だちはこの少年に「風の又三郎」とあだ名をつけます。

立春から数えて210日目、「二百十日」は稲の開花に台風襲来が重なる厄日とされてきました。

梅雨どきの豪雨の傷がまだ癒えない地域があります。どうか「風の神」が暴れないことを願っています。

真っ黒に日焼けした子らが久々に集う教室。

健康観の変化から「日焼けした子」も見掛けなくなつた酷暑の夏が過ぎていきます。



指宿市長 豊留悦男